

『塾、中学、高校、大学での授業経験者が語る日本の英語教育のゆくえ』

土屋 進一(2025)

紹介者名 土屋 進一

西武文理大学

1. はじめに

本稿は、『日本の英語教育のゆくえ』（土屋進一著，2025 年，幻冬舎）の新刊書籍紹介を目的とするものである。著者は，塾，中学，高校，大学とあらゆる教育段階での英語教育実践を重ねてきた経験をもとに，日本の英語教育の変遷と今後の展望を体系的に描き出している。特に，実際の教育現場に即した記述と，理論と実践の架橋を意識した構成が本書の特徴である。第二言語習得論や英語教育学の知見をもとに，それらを現場にどのように落とし込んで指導してきたかが示されており，随所に生徒・学生とのリアルなやり取りを描いたコラムが挿入されている。読者は，現場の空気感を肌で感じながら，理論と実践が交差する地点に立ち会うことができる。

2. 書籍の構成と特色

本書は，以下の 3 部構成で展開されている。

第 1 部 英語教育 30 年の変遷

1990 年代の文法訳読中心の指導から 2010 年代のコミュニカティブ・アプローチへの転換までの過程が，政策や現場の変化を交えて描かれる。

第 2 部 2020 年代英語教育の現在～中学・高校・大学での授業実践より～

2020 年代現在の高校・大学での授業改革やオンライン授業の実践，CLIL (Content and Language Integrated Learning)，個別最適化や探究的学びの実例が紹介されている。

第 3 部 英語教育のゆくえ

グローバル英語の捉え方，AI 時代の言語教育，エンゲージメント理論を踏まえたエモーショナル・インテリジェンス(EQ)の育成の可能性と重要性が論じられている。さらに，Swain (2005) によるアウトプット仮説が示すように，学習者が意味交渉を通じて言語を生成する過程は内在化に寄与するとされる。加えて近年では，内発的動機づけや感情的関与がそのプロセスに与える影響も注目されている。本書で紹介される探究型学習や模擬

国連などの実践は、それを裏付ける実証的事例といえる。

以下では、それぞれの部における内容を詳述していく。

2.1 過去 30 年間の英語教育の歩み

第 1 部では、1990 年代から 2010 年代にかけての英語教育政策、指導要領の変遷、入試制度の影響などが整理されている。著者は、文法訳読法の限界とその脱却に向けた改革の中で、現場で起こった混乱や挑戦を具体的に描いている。特に、「聞く・話す」技能の導入が教師と生徒に与えた影響について、現場の声を交えて論じられている。また、第二言語習得理論の進展が教育実践に与えた示唆についても触れられ、理論と実践のギャップをどのように埋めてきたかという教育者としての模索が描かれている。また、第二言語習得における「練習 (practice)」の意義については、DeKeyser (2007)によって体系的に整理されており、学習者が言語知識を運用能力に転化する過程において、明示的指導と意味ある言語使用のバランスが重要であることが示されている。

2.2 現在の課題と取り組み

第 2 部では、2020 年代の教育現場が直面している課題と取り組みが取り上げられている。特にコロナ禍によるオンライン授業の導入、ICT ツールの活用、そして「個別最適な学び」と「協働的な学び」の融合に焦点が当てられている。著者は、実際に行ってきたプロジェクト型学習 (PBL) や模擬国連活動などの実践例を挙げながら、生徒の主体性を引き出す授業づくりの工夫を紹介している。さらに、「教えない授業」など、学びの質を高めるための多様な取り組みが紹介されており、実践のヒントを多く含んでいる。特に注目すべきは、「教科横断型授業」への取り組みである。筆者は、英語を他教科 (国語、社会、理科、家庭科など) と連携させ、現実世界の課題に対して多角的にアプローチする学びの形が紹介されている。たとえば、物理×英語の教科横断型授業では、speed と velocity の違いを物理のベクトルの概念を学ぶことにより、「速さ」や「速度」といった訳語を超えた横断的な深い学びが得られる指導例を紹介している。このような教科横断的アプローチは、言語活動の Authenticity (真正性) を高め、学習者のモチベーションや内発的動機づけにも資する点が強調されている。

2.3 未来への展望

第 3 部では、グローバル時代における英語教育の新たなあり方が論じられている。著者は、ネイティブ・スピーカー中心主義からの脱却と、「伝わる英語」を育てる教育の必要性を強調する。そのうえで、AI 時代における言語学習の意義を再考し、言語教育が知識伝達から思考・対話・共創へとシフトすべきであるという見解を提示している。英語プレゼンテーション、探究型学習、異文化理解教育など、実際の授業での実践が豊富に紹介され、読者

は未来の英語教育の可能性を具体的に思い描くことができる。また、近年の生成 AI（例：ChatGPT）の登場により、英語教育におけるリーディングやライティングのあり方も再考を迫られている。AI を「使う」だけでなく、「AI と対話する力」を育むための教育が今後求められるだろう。こうした観点からも、「思考を言語化する力」や「文脈を読む力」の育成は、英語教育の根幹となるべきである。言語教育を通じて自己や他者と向き合い、共創的に学ぶ姿勢は、Dörnyei と Ushioda（2009）が論じるように、言語アイデンティティの形成や自己概念の変容とも密接に関係している。

3. 教育者としてのまなざし

本書の随所には、著者が出会ってきた生徒や教師たちとのエピソードがちりばめられており、教育者としてのまなざしがにじみ出ている。たとえば、「教え子が教師となって戻ってきた日」や「生徒にかけられた一言から自らの指導を見直した経験」など、読み手の共感を誘う記述が多く含まれている。これらのエピソードは、単なる指導法や指導技術の紹介ではなく、「人と人との関係性」の中で教育が成立するという根源的なメッセージを伝えている。教育のリアリティと温度感が文章に宿っており、読者は単なる知識としてではなく、経験として学びを共有することができる。さらに著者は、英語教育が単に学習者の成長を支えるだけでなく、教師自身の学びと成長のプロセスでもあることを強調している。教えることで気づくこと、学び直すことで視野が広がること、そうした「変化を恐れない姿勢」こそが、これからの教育者に求められる資質だと本書は示唆している。このような「なりたい教師像」や「成長する学び手としての自己」の意識は、Dörnyei が提唱する L2 Motivational Self System（Dörnyei & Ushioda, 2009）とも共鳴するものであり、学習者のみならず教師自身の内発的動機づけにも大きく関与すると考えられる。

4.1 読者層と本書の意義

本書は、現職の英語教員はもとより、教育実習生、大学・大学院で英語教育を学ぶ学生、さらには教育行政関係者や保護者にとっても有益である。教育の現場と政策、理論と実践、過去と未来を行き来しながら語られる構成は、読者の背景や立場を問わず、さまざまな観点から読み取ることができる。とりわけ英語教育を取り巻く現状に問題意識を持つ読者にとっては、本書は思考のきっかけと方向性を与えてくれる一冊である。

4.2 英語教育を支えるコミュニティと連携の可能性

本書の実践記録からは、教室内で完結する英語教育ではなく、地域社会や外部機関との連携を通じて、学習者の言語使用機会を拡張しようとする試みが随所に見られる。たとえば、模擬国連や PBL における課題設定においては、学習者が自らの地域や学校外の課題と向き合いながら、英語での情報収集・整理・発信を行っている。こうした実践は、言語使用のり

アリティ (authenticity) を確保し、言語活動の目的性 (purposefulness) を高める点で、応用言語学的にも重要な意義をもつ。

特に、英語教育においては、学習者が教室外で行う自己主導的な学習や非形式的学習の重要性を強調しており、学習の成功には「教室の内外」の相互作用が関与している (Benson & Reinders, 2011)。本書の事例においては、学習者が学校外の専門家や市民と協働することで、学習文脈が拡張され、社会的インタラクションを通じた言語発達の可能性が拓かれている。

また、こうした外部連携の実践は、教師にとっても従来の教授観を問い直す契機となる。すなわち、教師は単なる知識伝達者ではなく、学習環境の設計者 (learning environment designer) としての役割を担うことになる。本書はそうした教員の専門性開発 (teacher professional development) の視点からも注目に値する。

英語教育の高度化・複層化が進む中で、コミュニティとの連携は単なる補助的活動ではなく、むしろ学習のオーセンティックな場を創出する中核的要素であるといえる。本書はその萌芽を示す好例であり、今後、学習環境デザインや ICT の効果的な活用を含む CALL (Computer-Assisted Language Learning) 的観点からの発展的研究が期待される。

5. おわりに

『日本の英語教育のゆくえ』は、英語教育に携わるすべての人にとっての座標軸となる一冊である。実践と理論、過去と未来、個別と協働の間を橋渡しする本書は、教育の本質を問い直す良き機会を提供してくれる。とりわけ、「なぜ英語を学ぶのか」「誰のための英語教育か」といった根源的な問いに立ち返る手がかりとなるだろう。学会関係者はもちろんのこと、現場で日々格闘する実践者、さらには英語教育に関心のある保護者や学生にも広く読まれるべき書籍である。本書は現職教員や教育実習生、大学院生、そして子どもの英語教育に関心を寄せる保護者にとっても、未来への希望と確かな指針を示す一冊である。

参考文献

- Benson, P., & Reinders, H. (2011). *Beyond the language classroom: The theory and practice of informal language learning*. Palgrave Macmillan.
- DeKeyser, R. M. (Ed.). (2007). *Practice in a second language: Perspectives from applied linguistics and cognitive psychology*. Cambridge University Press.
- Dörnyei, Z., & Ushioda, E. (Eds.). (2009). *Motivation, language identity and the L2 self*. Multilingual Matters.
- Swain, M. (2005). The output hypothesis: Theory and research. In E. Hinkel (Ed.), *Handbook of research in second language teaching and learning* (pp. 471–483). Lawrence Erlbaum.